山梨日日新聞
| 四つ折りで読む紙面 |
月刊 moritomirai 森と未来 07 2023.01

餌になる木の実や寝床を求め、木に身を寄せる樹上動物や鳥類。
地面には下草や花が育ち、陸上動物やチョウなどの昆虫が集まってくる。
健全な森は、さまざまな動植物のすみかとなる「生物多様性の宝庫」だ。
一方で、人間による無秩序な開発や放置、
地球温暖化などによって森の環境が悪化すると、動植物の生活は脅かされる。
生き物のすみかを守るには、自然と共生する人々の意識が欠かせない。
山梨の森に息づく希少な生き物や、豊かな生態系を後世に引き継ぐために
私たちにできることなどについて、
精力的に活動している研究者や団体に聞いた。

moritomirai.com

illustration：オエムシ

森にすむ命と生きる

ミズナラやカラマツ、サルナシなどが立ち並ぶ、八ケ岳南麓の森。うっすらと雪をかぶった朽ち木のくぼみで、大人の手のひらより小さな動物が体を丸めて眠っている。日本の固有種で、国の天然記念物でもあるヤマネ（ニホンヤマネ）だ。保護のために調査研究を続けている湊秋作さんは「森の食物連鎖の上位にいるヤマネを守ることは、森を守ることと同じ。ほかの動植物や私たちの暮らしを守ることにもつながる」と説明する。

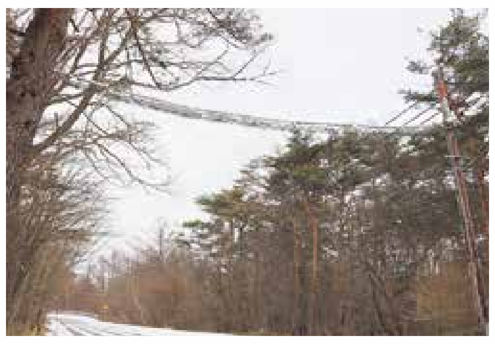
ヤマネはネズミの仲間。体長はしっぽまで含めて10～15㌢ほどで、体重は約18㌘。夜行性で主に樹上で生活している。広範囲を活発に動き回り、花、昆虫、樹皮、木の実など季節に応じてさまざまなものを食べる。それらが欠けていたり、森が道路などで分断され、開発されたりすると姿を見せなくなるため、森の健全さや多様性を示す象徴とされる。

湊さんが代表を務めるヤマネ・いきもの研究所（北杜市）などによると、ヤマネは甲府市中心など都市部を除く県内全域に生息。清里高原を中心に北杜市内の森で目撃例が多いという。同市では先進的に保全の取り組みが進められていて、代表的なものが道路建設などで分断された森をつなぐ小動物用の陸橋「アニマルパスウェイ」だ。

実現に向け2004年に研究が始まり、07年に北杜市の支援で全国初となる施設が同市の市道上に完成。取り付けたビデオカメラを約7200時間分調査したところ、ヤマネやニホンリスなどの小動物が約2千回、森と森を行き来する様子が映っていた。先立って県道路公社が市内に整備した「ヤマネといきもののトンネル」（1997年）「ヤマネブリッジ」（98年）と共に、山梨発で世界初の森の命をつなぐ「道」として評価され、パスウェイはこれまでに国内9カ所、英国内1カ所に広がった。

森の豊かさの象徴とされるヤマネ（いずれもヤマネ・いきもの研究所提供）

「動物の道」がつなぐ共生



道路による森の分断を防ぎ、小動物のすみかを守る陸橋「アニマルパスウェイ」

これらの施策が実を結ぶ一方、道路建設以外の要因でヤマネの個体数が減ってきている可能性も指摘されている。湊さんが長年調査を続けている清里高原のある森では、確認できた個体数が年々減少。一つの地点のデータであり減少傾向を断定できるものではないと前置きした上で、湊さんは地球温暖化や開発などによる環境の変化が影響した可能性は否定できないとする。

湊さんは関西学院大教授、同大SDGs・生物多様性研究センター代表などを経て、2019年に研究所を設立。調査研究に加えて活動の柱に据えたのが、児童から企業人までへのSDGs教育だ。「研究を通じて、ヤマネは朽ちた木やツルが絡みついた木などを好んでいることも分かってきた。人間の視点だと不要・不便なものに見えるが、ヤマネの視点だと生活に必要なものだと言える。正しい知識と、人間本位でない視点を持つことが共生の入り口になる」と呼び掛ける。

日本で唯一、ヤマネに特化した展示施設清泉寮やまねミュージアムを北杜市内で運営するキープ協会（同市）も、教育活動に力を入れている。冬の森で動物の足跡を探すツアーなど、体験を重視した教育プログラムを多数開発。昨年は新たに、協会が開発した教育プログラムの運営方法を地域のキャンプ場関係者らにレクチャーする研修会も企画した。

同協会の担当者は「自然環境や生物多様性の保全は地域、社会が一体となって取り組まなければ実現できない。長年の活動で培ってきたノウハウを広く共有し、多くの人の手で豊かな自然を守っていきたいと考えている」と狙いを説明する。

県土の約8割を森林が占める山梨県は、富士山、南アルプス、八ケ岳などの山々に囲まれ、標高差の大きい変化に富んだ地形を有する。日本本州の中心部に位置する地理的条件も重なり、「国内でも有数の多様性に富んだ豊かな生態系」（県森林総合研究所）が形成されている一方、近年は地球温暖化や開発、増加したニホンジカによる食害、外来生物の侵入などによる環境の変化が深刻化。幼虫の時に特定の花だけを餌にするチョウや国内のごくわずかなエリアでのみ見られる植物スルガヒョウタンボクなど、すみかを脅かされている希少な生き物も少なくない。

「オオムラサキ、オオクワガタ、コムラサキ…。図鑑に載っているような珍しい昆虫がたくさんいて、人の生活と豊かな自然が美しく調和していた」。昨年12月に亡くなった、ジャポニカ学習帳の表紙写真を手掛けたことなどで知られる自然写真家・自然ジャーナリストの山口進さん（享年74）は、豊かな自然と生態系に魅了され1999年に北杜市に移住。生前の取材では、活動の根底にあるのは共生への思いだと明かし、生態系の変化に対する警鐘も鳴らしていた。

「山梨のゴマシジミ（シジミチョウの一種）は大ぶりで羽根の青みが強くとても美しかった。昔は県内のいたるところで当たり前に見られたが、今はどこを探しても見つからない。持続的に自然と共生していくために何ができるのか、一人一人が考え続けることが大切だ」

研究のため森の中でヤマネを探す、ヤマネ・いきもの研究所の湊秋作さん（右）と饗場葉留果さん

清泉寮やまねミュージアム。湊秋作さんの研究成果を展示する施設としてスタートし、湊さんは前館長を務めた　＝写真はいずれも北杜市内

ワード解説

ヤマネ（ニホンヤマネ）

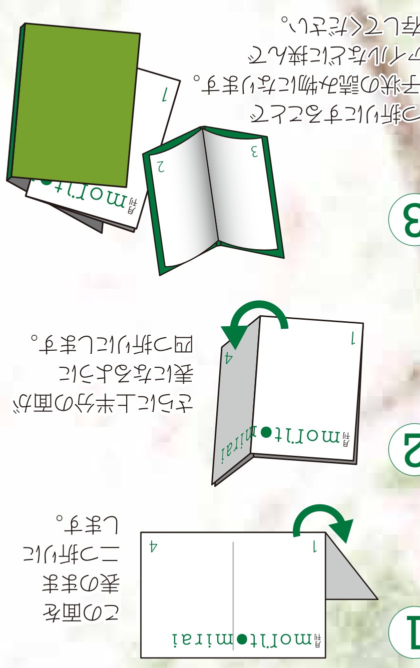
ニホンヤマネは日本の固有種で国の天然記念物。世界にはヨーロッパヤマネなどの近縁種がいる。道路によって分断されていない広い森を主な生息地とし、花や虫、樹皮などさまざまなものを食べる。太古から姿が変わらない「生きた化石」としても知られていて、ドイツでは5千万年前の全身化石が見つかった。

アニマルパスウェイ

道路建設などで分断された森林をつなぐ樹上動物のための通り道を表す造語。湊秋作さんやキープ協会、大手建設会社関係者などで構成する研究会が中心となり2004年に研究が始まった。設置や普及に向けた低コスト化などの取り組みは15年、環境省がSDGsを体現する取り組みを表彰する「グッドライフアワード」で環境大臣賞を受賞した。

YAMANASHI SDGs PROJECT
やまなしSDGsプロジェクト

この紙面の読み方



① この面を表のまま二つ折りにします。

② さらに上半分の面が表になるように四つ折りにします。

③ 四つ折りにすることで冊子状の読み物になります。ファイルなどに挟んで保存してください。

月刊moritomirai
次号は2月27日（月）予定

本紙面は山梨の森林サイト「moritomirai」でもご覧いただけます

企画制作：山梨日日新聞社広告局